堺で校長せんせい！

きじま　みゆき
木嶋　美雪　**（堺市立南八下小学校長）**

長野県の民間企業から、本市の任期付校長公募に合格し、令和５年４月から現職。

堺市では、平成 24 年度から任期付管理職を採用しており、 現在、17 人の任期付校長が勤務しています。その中から堺市立南八下小学校の木嶋校長にお話を聞きました。

後編（全２回）

１人の先生の授業を変えると、こどもが変わった。それをみた周りの先生も

――校長として２年が過ぎて、これまで取り組んできた成果を教えてください。

先ほど（前編参照）民間との違いという話をしましたが、もう一つ、大きく異なる点が、先生方の目標の立て方です。学校では「○○を頑張る」といった、成果の測定が難しい目標が多くみられました。一方、民間企業では目標設定の際に、「どうやって測定するか」、「何をもって成果とするか」が非常に明確にされています。そこで、学校目標もわかりやすく、より実現可能性の高いものにするよう工夫しました。目標が明確になることで、先生方も学級目標や日々の授業とどうつなげるかが見えやすくなってきたように感じます。

また、学校目標に基づいて、どのように行動するかを組織的に考えるようにしました。管理職が直接指示するのではなく、組織全体が機能し、中堅教員の育成にもつながるような仕組みづくりを意識しています。これは予算をかけて変えたわけではなく、今ある資源の中で少しずつ変えられるところから取り組み始めている段階です。

――いろいろと変える時に、職員のモチベーションとのバランスもあるかなと思うんですけど、そのあたり、配慮された部分はありますか。

授業改善に向けて、ICT 機器を日常的に使うだけではなく、次のステージに行くためには授業のスタイルそのものを変える必要があると感じていました。しかし、「授業を変えよう」と言葉で伝えてもなかなか浸透しません。そこで、まずは一人ずつ開拓するしかないと考え、当時の主幹教諭という影響力のある先生にあえて授業改善に取り組んでもらいました。主幹教諭には本当に悩みながら２・３か月かけて授業スタイルを見直してもらいました。すると、こどもたちの反応が明らかに変わったのです。その変化が一つのモデルとなり、授業改善の効果を証明することができました。

その結果、中堅の先生方も自分でやってみようと動き始め、少しずつ変化が広がっていきました。学校全体を一気に変えるのは難しいですが、１ 人・2 人と変化の担い手が現れ、最終的にこどもたちが変わることで、先生方自身も「自分もやってみたい」と思えるようになる流れが今、少しずつ形になってきています。

校長先生の一日

――学校現場にいない方にとっては気になる部分だと思うんですが、実際に校長先生の一日の過ごし方はどんな感じですか。

まず朝は、教頭と教務主任とともにその日の大きな行事や来校者の確認を行います。担任からの報告事項もあれば併せて確認します。その後、登校指導のために校門に立ち、こどもたちの様子を見守ります。地域の「見守り隊」の方々や、忘れ物を届けてくださる保護者の方とも挨拶を交わします。

特に予定のない日は、そのまま校内に入り、欠席者の確認をします。養護教諭や担任と情報を共有しながら欠席状況を把握します。冬季には必要に応じて休校対応も行います。

確認後はメールチェックなどのデスクワークをして、一段落したところで授業の様子を見に行きます。

早い日は 3･4 時間めから、特に予定がなければ 5･6 時間めまで教室を回ります。4 時間めの途中には給食の検食があり、給食時間は配膳の手伝いをします。こどもたちが給食場に取りに来る際のサポートや、職員室で職員の給食準備を行います。給食後は再び授業を見に行くことが多いです。
放課後はできるだけ先生方と話す時間を確保しています。授業について話すこともあれば、ちょっとした雑談を通じて関係づくりをすることもあります。職員会議などの会議がある日もあります。
現在、4 年生がデザイン思考を取り入れた活動に取り組んでおり、総合的な学習の時間には、担任の先生と一緒にデザイン思考の授業を行っています。また、職員室での児童対応や、教頭が出張の際には職員室の管理、電話対応もします。雨漏りなどのトラブルがあればすぐに現場に駆けます。

授業はできるだけ見たい。体験したい。

――その一日の中で、特に大切にしている部分はどこですか。

授業はできる限り多く見たいと思っています。授業を見ることで、先生方と対話する機会が増えますし、先生たちの考え方は授業や学級経営に自然と表れるものです。なるべく教室を回り、一人ひとりの授業をじっくりと見たいと思っています。もっと言えば授業を「体験」したい。こどもの視点に立って、その先生の授業を感じたい。そして、その先生が毎日どんな思いで学級を運営しているのかを理解したい。だからこそ、その時間はできる限り確保したいと考えています。

――授業に入って、見ていたら、先生たちも「どうでした」とか聞きに来られますか。

ありますね。今、高学年はこどもたちに委ねた授業を行っているため、授業中でも先生と自然に会話ができるようになっています。例えば、「今、こどもたちはこうやって活動しているけど、この時間少し長すぎない？」「途中で止めて、指導を入れてもいいんじゃない？」というように、授業を見ながらリアルタイムで声をかけることもあります。逆に先生からも「これやってみたんですが、困っていて･･･」、「こう言おうと思っているんですけど、どうですか？」といった相談が、スムーズにできるようになってきています。こうしたやりとりが授業中にできることで、放課後にフィードバックの時間を多くとらなくても済むような流れが少しずつできてきています。私だけでなく、ほかの先生方も互いに授業を見合っているので、見に来てくれた先生とその場で相談しながら、常に改善を重ねています。

こどもたちの笑顔は先生たちの笑顔

――この２年間の中で、印象に残っていること、嬉しかったことをあげるとしたらどんなことですか。

嬉しいことは本当にたくさんあります。こどもから手紙をもらったりすることもありますが、やはり一番嬉しいのは、朝、元気にこどもたちが学校に来てくれること。校内にこどもの声が聞こえ、帰りに大きな声で笑いながら元気に帰っていく。その姿を見ると安心します。「笑顔で来て、笑顔で帰る。」その日常が当たり前のように続いていくことが何よりも嬉しいです。
そして、こどもたちが笑顔で帰っていくということは、先生たちも笑顔ですごせているということ。その日一日が無事に、楽しく終えられた証です。そんな日々がこれからも続くことを、心から願っています。

いつか人生のどこかで思い出してもらえたら

――では最後に、本市の任期付校長をめざそうと考えている方へメッセージをお願いします。

堺市に来て、今こうして日々の仕事に取り組めているのは、本校の先生方に恵まれていることが大きな要因です。加えて、堺市の校長先生方の存在が私にとって非常に大きな支えとなっています。
その中には女性校長も多く、経験豊富な方から私

と同じぐらいのキャリアの先生方まで、幅広い層の方々がいます。そうした皆さんに温かく受け入れていただき、日々支えられていることに、心から感謝しています。公募で来る方は、多くの場合、不安を抱えていると思います。特に、事前にしっかり調べて検討した方ほど、その不安は大きいかもしれません。私自身、堺市の経験しかありませんが、深く、温かく受け入れてくれる堺市の風土は、自信を持っておすすめできると言えます。

学校によって状況は異なるかもしれませんが、夜遅くまで残る必要はそれほどありませんし、小さなお子さんがいても十分に働けます。また、これを機に次のキャリアアップをめざすことも可能です。だからこそ、若い方たちには積極的に挑戦してほしいと思っています。

そして私自身、先生方やこどもたちに、「全然違う場所から飛び込んできて、ある程度の年齢を超えてもチャレンジしている人がいた。」という存在として、いつか人生のどこかで思い出してもらえたら嬉しいなと思っています。40 代後半、50 代、60 代で全く違う市に来て、違う仕事に挑戦する。それはとても面白いことですが、ハードルが高いと感じる方もいるかもしれません。でも、「そういえば、うちの校長、そんな感じだった」と思い出してもらえたら、その子が何かにチャレンジするとき、背中を押すきっかけになるかもしれません。今、キャリアチェンジを考えている方や、全く違う職種に挑戦しようとしている方にとっても、「実際にやっている人がいる」と思ってもらえることが何かの後押しになればと思っています。

«編集後記»

インターネットのニュースを見て、堺の校長公募にチャレンジされた木嶋校長先生。

堺との縁も、教員免許もないけれど、民間企業での経験を活かして、学校現場の現状を考えながら、何よりもこどもたち・先生たちのために日々改革に取り組んでいる姿が印象的でした。

ご覧いただいたみなさんも、

「堺で校長せんせい！」お待ちしています。